

# 北海道における標準語意識

小野 米 一

## はじめに

われわれ地方人は、地方語の生活・方言の生活をしている。北海道とて、その例外ではない。ところが、北海道では、「方言」の生活をしているという意識が、きわめて薄い。ふだん日常の生活のなかでは、自分たちのことばが方言であるか標準語であるかというような意識を、ほとんどもつこともない。むしろ、標準語を使うのが当然であり、毎日、標準語の生活をしているとさえ考えられている。そして、「標準語」といえば、他地方ではたぶん「東京」のことばであろうが、北海道では「札幌」のことばである。

いったい、北海道における「標準語意識」は、どのようなものなのであるか。その意識の実態をさぐることによって、国語教育・標準語教育の問題を考へてみることにしたい。

## 一、場面とことばの使い分け

1 まず、いくつかの場面を想定して、それぞれの場面におけることばづかいが、どの程度方言的であるかあるいは標準語的であるかの意識を確かめてみる。設定した場面は、次の九場面である。

(末尾の△▽内は各場面の略称)

① ふだん家のなかで家族と話すとき△家▽

② 隣り近所の顔見知りの人と話すとき△隣▽

③ 同じ町のなかであまりよく知らない人と話すとき△町民▽

④ 旅の人、よその土地の人に話しかけられて話すとき△旅人▽

⑤ 校長室で、校長先生と話すとき△校長▽

⑥ テレビスタジオでアナウンサーと話すことになったとしたら

△テレビ▽

⑦ 東京で道をきくとしたら△東京▽

⑧ 町内で道をきくとき△町内▽

⑨ この付近の人、三十人ぐらゐの集まりの席で意見をいうとき

△集会▽

また、ことばづかいについての選択肢は

1 方言のみ

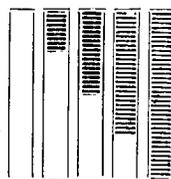
2 方言が多い

3 方言と標準語が半々

4 標準語が多い

5 標準語のみ

の五つであり、これをカードで示して回答を求めた。単に「共通語」とすると、北海道の場合、「全国共通語」とは異なる「地域共通語」







であった。全体に、松前町よりも「方言が多い」がやや少なく、「標準語が多い」「標準語のみ」がやや多くなっている。これは増毛町の共通語化が松前町よりも進んでいることを示す。場面に応じての方言から標準語への切りかえは、松前町の場合とほぼ同様である。ただ、漁村の大別荘と農村の信砂とで、⑨集会よりも⑩町内に「標準語」が多くなっているのは、松前町にくらべて町中心部までの距離がいくぶん離れており、それだけ改まり意識をとまなげて、標準語への切りかえが意図されるのであろう。商店街の岸中は松前町とまったく一致している。

5 内陸部の農村でも同様の調査をおこなった。南茅部町と同じく、場面が少なく、使い分けも「方言」「方言と標準語がまざる」「標準語」の三段階で質問した。道東の農村、十勝の中川郡豊頃町（注5）二宮（注5）（一九七九）では、

表4 場面と使い分け (豊頃町 1979)

場面		使い分け	
④旅人	③町民	⑨集会	①家隣
56	51	25	19%
41	45	66	70%
4	4	9	9%
		標準語	まざる
			方言

であり、松前町、南茅部町、増毛町と同様の結果が得られた。南茅部町よりも「標準語」がやや多く、「方言」がやや少ない。豊頃町

では一九七一年のアンケート調査資料（三一〇名分）もある。%値は一九七九年のものとはほぼ同じであるが、④旅人の場面のみ、標準語68%、まざる31%、方言1%で、標準語の比率が高いのは、八年前のほうが外来者に対してより意識的に標準語への切りかえをおこなおうとしたからであろう。

6 道央の農村、空知郡栗沢町（注6）蘆波（注6）（一九七七）では、

表5 場面と使い分け (栗沢町 1977)

場面		使い分け	
⑤校長	④旅人	⑨集会	①家隣
46	42	35	16%
46	49	43	47%
7	8	30	29%
1	1	3	8%
1	1	1	1%
		5の標準語のみが多い	4の標準語
			3半々
			2方言が多い
			1方言のみ

であった。全体としては、これまでとりあげた全地点と同様の傾向を示す。が、これまでのどの地点よりも、全場面を通じて、「標準語のみ」「標準語が多い」の比率がきわめて高い。①家や②隣でも「標準語のみ」が10%以上あり、「標準語が多い」も50%近い。すなわち、栗沢町では、ふだんのいちばんくだけた場面であっても、半数以上の人々が「標準語」で話しているという意識をもっているわけである。したがって、⑨集会の場が③町民以下の△ソト▽の場面と非常に近いものになり、④旅人と⑤校長の場面差もほとんどな

くて順位が逆転している。そうではあるが、なわかつ、場面によることばの使い分けの意識はもたれているのであり、「方言」から「標準語」への（一）というより、栗沢町の場合は「方言と標準語がまざる」から「標準語のみ」への、切りかえがなされているのである。

7 このように、「海岸方言」とされる道南地方や海岸部でもちろんのこと、「内陸方言」とされる内陸部の農村でも、日常の生活語についての「方言」意識をもち、場面に応じて「標準語」へと切りかえようとしていることが指摘できる。ただ、「海岸方言」域では日常語が「方言」とされるものの、「内陸方言」域では「方言」意識がきわめて低く、むしろ「標準語」意識が強いはたらいっているのである。

## 二、「地もとのことば」

1 それでは、北海道内各地の人々は、自分たちの「地もとのことば」をどのように意識しているのであろうか。また、「北海道のことば」や「標準語」について、どのような意識をもっているのであろうか。この点について説明してみたい。

まず、「地もとのことば」について、「標準語に近い」「方言が強い」「どちらともいえない」の三つの選択肢によって回答してもらった。

2 北海道南西端、松前郡松前町(注1)(一九七九)での調査結果は、次表のとおりである。

表6 地もとのことば (松前町 1979)

唐	津	弁	天	地点		
				事項	年層	
い え な い	ど ち ら と も	い え な い	ど ち ら と も	27	28	明治生
50	23	43	29	31	19	大正生
	25	54	27	20	24	戦前生
	10	65	11	11	4	戦後生
	8	64	32	23	18	小学
	8	77	5	22	19	中生
	14	62	19			全体

これによってみると、大勢としては「方言」とされているものの、「標準語」とする回答が全年層にわたっており、漁村の弁天で19%、商店街の唐津でも14%にのぼる。

北海道方言は道南および海岸地方一帯におこなわれる「海岸方言」と、その他の内陸地方の「内陸方言」とに二分される。海岸方言には東北方言(ことに北奥方言)に通じる特色が多分にみとめられるのに対して、内陸方言はいちじるしく全国共通語化がすすんでいる。松前町は海岸方言の典型的な一地域である。北海道のなかでは、いわば、ことばづかいの「よくない」地域である。その松前町で、地もとのことばについて、60%余りの人が「方言」だと考えているが、なお、「標準語」とみる人も相当数いるわけである。漁村と商店街という地点差はほとんどないが、年層差がわずかにみとめられる。明治・大正生まれに「標準語」とみる人がやや多く、昭和生まれに

「方言」とみる人がやや多くなっている。

3 同じく「海岸方言」の、道南東端、南茅部町(注3)(一九七八)での調査でも、松前町の場合とほぼ同じ結果が得られた。

表7 地もとのことば (南茅部町 1978)

事項	年 層	
	標準語	方言
明治生	12%	28%
大正生	17%	42%
戦前生	16%	30%
戦後生	17%	26%
小中 学生	17%	27%
全体	16%	29%

ここでも、地もとのことばを「標準語」に近いとする者が16%にのぼる。松前町にくらべて「方言」がやや少なく、「どちらともいえない」がやや多くなっているのは、アンケート調査によるためであらう。

4 次に、内陸部の農村、十勝の豊頃町二宮(注5)(一九七九)の例を示そう。

表8 地もとのことば (豊頃町 1979)

事項	年 層	
	標準語	方言
明治生	38%	27%
大正生	46%	20%
戦前生	26%	29%
戦後生	34%	29%
小中 学生	50%	25%
全体	36%	27%

これによると、地もとのことばを「標準語」と考える人の割合が

36%までふえ、「方言」だとみる人とはほぼ同率である。内陸部では、都市はむろんのこと、農村でも、地もとのことばを「方言」だとする人は比較的少なく、「標準語」とみる人が多い。豊頃町で両者がほぼ同率となったのは、この地域が福島県相馬地方からの団体入植地であるため、方言としての「相馬弁」を意識することが強いからだと思われる。

5 さいごに、内陸部のうちでもとくに共通語化のすすんでいる都市の例として、札幌市K(注7)(一九七七)のものを掲げよう。

表9 地もとのことば (札幌市K 1977)

事項	年 層	
	標準語	方言
一代め	63%	13%
二代め	88%	0%
三代め	79%	13%
全体	77%	12%

札幌市では、地もとのことばが圧倒的に「標準語」と考えられているわけで、「方言」はわずかに6%しかない。調査人数が少ないので統計的処置にはなじまないが、これはいちおう全体的傾向をほぼ集約しているとみることができそうである。のちにもう一つの調査札幌市S(一九七八)と比較するが、両者の%値はよく似ている。

### 三、北海道のことば

1 次に、地もとのことばではなくて、「北海道のことば」はどんななことばだと思ふかについて調査した。これも選択肢は「標準語

に近い」「方言が強い」「どちらともいえない」の三つである。

2 道南の松前町(注1)(一九七九)では、次表のようであった。

表10 北海道のことば(松前町 1979)

唐津		弁天		地点	
い え な い	ど ち ら と も	い え な い	ど ち ら と も	事 項	年 層
50	23	27%	23	23	54%
33	22	44%	19	46	35%
35	28	37%	24	32	43%
31	46	23%	24	28	48%
39	46	15%	18	50	32%
37	32	32%	22	37	42%
				明治生	大正生
				戦前生	戦後生
				小中	学生
				全体	

北海道のことばについては、漁村の弁天で「標準語」とする回答が、商店街の唐津よりも多くなっている。北海道のことばとして具体的にとのようなことばを思いうかべているかによって、その判定は大きく変わってこよう。質問では「北海道のことば」についてあえて限定を加えなかった。松前町の調査では、函館市あたりのことばが想定されているようである。

地ものとことばについては両地点ともほぼ同率であった。(しいていえば、弁天のほうが「標準語」がやや多い。)じつさいのことばづかいを比較すると、弁天のほうが方言色が強く、唐津ではそれよりも共通語化がすすんでいる。(注2)そうであるのに、このような結果が

出たのは、ことばに対する認識の態度のちがいによるものではあるまいか。すなわち、商店街の唐津では函館市あたりのことばづかいであっても毎日の自分たちのことばづかいにくらべて、それほどずばぬけて「標準語」だとの意識をもたない。ところが、漁村の弁天では、函館市あたりのことばをきけば、毎日の自分たちのことばづかいにくらべて、「標準語」だとの意識をもつことが多いのである。

ちなみに、ふだんことばづかいに気をつけているか否かについて質問してみると、

表11 ことばづかいに気をつけているか(松前町 1979)

唐津		弁天		地点	
い え な い	は い	い え な い	は い	事 項	年 層
9	64	27%	0	50	50%
28	42	30%	15	39	46%
22	47	31%	11	57	32%
15	50	35%	12	52	36%
23	54	23%	27	59	14%
20	50	30%	14	51	35%
				明治生	大正生
				戦前生	戦後生
				小中	学生
				全体	

であった。「気をつけている」は弁天35%、唐津30%で、商店街よりも漁村のほうが多くなっている。常識的に考えれば、漁村よりも商店街で「はい」が多くなるはずではないか。私はこれを言語感覚のちがいとして考えてみる。すなわち、商店街の唐津では、お客さ

ん相手の毎日であるだけに、ことばに対して気をくばる。(松前町は観光地であって、観光客も多い)それだけに、地もとのことばを「標準語」に近くなく「方言」が強いと判断する。北海道のことばについても同様の判断をし、加えて「どちらともいえない」の比率が高い。ふだんのことばづかい意識としては、「気をつけている」けれども十分に気をつけているとはいえない気もちがあつて、「はい」がやや少なく、かわりに「どちらともいえない」がやや多くなつた。それに対して漁村の弁天では、ことばづかいについてそれほど切実なものがなく、いきおいことばづかいについての判断が甘くなる。そのためかえて「標準語」に近いとする判定が多くなつたのではあるまいか。この推定は、他の地域と比較してみると、いさう納得しやすいように思う。

3 同じく道南の南茅部町(注3)(一九七八)での調査結果を示せば、

表12 北海道のことば(南茅部町 1978)

事項	年層	
	標準語	方言
どちらともいえない	64%	15%
明治生	54%	32%
大正生	42%	36%
戦前生	41%	26%
戦後生	32%	26%
小中	39%	24%
全体		

であつて、松前町の場合と比較的よく似ている。しいていえば、松前町にくらべて、年層差がみられる。「標準語」が老年層から若年層へとしだいに減少していくのに対して、「方言」はわずかずつではあるが増加している。「どちらともいえない」も若い層でふえる。

明治・大正生まれの人々が北海道のことばを「標準語」視しがちなものに対して、若い層では「方言」とみ、あるいは「どちらともいえない」とみるなど、現実の客観的認識が高まってきていると考えられる。

4 同じく海岸方言に属する地域であつても、道南から離れると、事情がいくぶんちがつてくる。日本海岸北寄りの増毛町(注4)(一九七七)の調査では、次のようであつた。

表13 北海道のことば(増毛町 1977)

事項	年層		地点
	標準語	方言	
どちらともいえない	42%	11%	明治生
大別	74%	0%	大正生
別	63%	0%	戦前生
大別	70%	0%	戦後生
大別	36%	3%	小中
大別	60%	1%	全体

増毛町では、漁村の大別、農村の信砂、商店街の畠中の三地点を選んで全数調査をおこなつた。全体としてみると、漁村の大別

にくらべて、農村の信砂・商店街の舟中で「標準語」の比率が高く、「方言」の比率が低い。松前町や南茅部町にくらべて、これは、きわだった特色である。「どちらともいえない」がきよくたんに少ない点もめだつた。

「標準語」と「方言」との比率はちょうど相補的になつてゐる。「標準語」とするのは、三地点とも、明治生まれでは（他の年層にくらべて）やや低いが、大正・戦前・戦後生まれは高く、小中学生で半減する、という、右さがりの山型カーブをつくる。「方言」のカーブはちょうどこの逆で、凹型となり、小中学生で急激に増加する。六十五歳ぐらい以下二十歳前後までの「大人（社会人）」は、北海道のことを「標準語」とみているわけである。小中学生では逆転して「方言」が過半となるのは、生活範囲の狭さから「北海道のことば」が具体的実感としてつかめないのと、一方で学校教育の成果やテレビ言語の影響があるのではあるまいか。

5 この傾向は、内陸部の農村においてもみとめられる。道東の豊頃町二宮（<sup>注5</sup>一九七九）では、

表14 北海道のことば  
（豊頃町 1979）

事項	年層	
	標準語	方言
どちらともいえない	23	15
	62%	75%
	72%	71%
	63%	70%

であったし、道央の栗沢町磯波（<sup>注6</sup>一九七七）では、

表15 北海道のことば  
（栗沢町 1977）

事項	年層	
	標準語	方言
どちらともいえない	23	9
	69%	83%
	68%	87%
	75%	73%

であった。数値に多少の出入りはあるが、全体傾向がほぼ似ている点は注目されよう。豊頃町二宮は福島県相馬地方からの団体入植地であり、栗沢町磯波は富山県礪波地方からの団体入植地である。前者は東日本方言（南奥方言）、後者は西日本方言（北陸方言）の流れをくむわけであり、移住後八十余年をへて三代目・四代目の活躍する今日ではあるが、それぞれの故地の方言のなごりは両地点ともいづらか観察されるのである。にもかかわらず、「北海道のことば」に対するみかたはほぼ一致している。地もとのことばについては、豊頃町二宮に「方言」とする比率がややめだつたのに対して、栗沢町磯波は「標準語」とする比率が高いようである。（栗沢町では「地もとのことば」についての意識調査をやっていないが、家族や隣人に対することばの使い分けの意識調査からそのことが推定できる。）しかしながら、両地点とも、「北海道のことば」についての意識のしかたはほぼ一致するわけで、ここに北海道内陸部の農村における「北海道のことば」の認識についての典型をみる事ができる。団体入植地でない農村での調査資料はないが、増毛町信砂の例からお

およその推定を立てることができよう。

6 ところが、北海道の中心都市札幌市S(一九七八)の調査結果をみると、「標準語」が54%、「方言」が32%であった。

表16 北海道のことは  
(札幌市S 1978)

事項	年層	
	標準語	方言
い	19	20
え	8	43
な	12	40
い	13	28
え	11	32
な	13	32
い	5381	4552
え	3844	3337
な	2232	2232
い	1	2
え	3	4
な	5	全体

年層の切りとりかたが他地点のものとは異なるが、とくにどの年層にかたよがりがあるというほどではない。もう一つの札幌調査、札幌市K(一九七七)でも、

表17 北海道のことは  
(札幌市K 1977)

事項	年層	
	標準語	方言
い	38	12
え	25	12
な	20	30
い	28	18
え	50%	63%
な	50%	54%
い	一代め	二代め
え	三代め	全体
な		

となっており、全体傾向はほぼ一致する。「標準語」とみる比率が、道南地方よりも高いものの、増毛町や内陸農村よりも低いのは、札幌市のことは念頭にあつて(表9参照)、それとくらべた場合、「北海道のことは」となれば相対的に多少「方言」が多いと意識さ

れるのではないかと思う。

#### 四、標準語意識

1 以上みてきたように、北海道では地もとのことを、道南地方でこそ「方言」とみているものの、内陸地方や諸都市では「標準語」とみる。「北海道のことは」となれば、「方言」とみる人よりも「標準語」とみる人の比率が高い。それでは、東京のことはと札幌のことはとでは、どちらが「標準語」に近いと考えているのであろうか。

2 まず、道南地方の例からあげよう。松前町(注1)では、

表18 標準語  
(松前町 1979)

事項	年層		地点
	標準語	方言	
い	14	77	明治生
え	19	50	大正生
な	14	59	戦前生
い	8	39	戦後生
え	23	19	小学生
な	16	50	中学生
い	21	36	全体
え	21	21	
な	19	19	
い	22	22	
え	22	22	
な	32	32	
い	55	55	
え	29	29	
な	29	29	

であった。弁天・唐津とも、全体傾向がほぼ一致する。「東京」29%に対して「札幌」が50%である。札幌とする比率が東京とするのにくらべて非常に高い。国の中心都市「東京」のことはよりも、むしろ北海道という地方の中心都市「札幌」のことはを、より「標準

語」的と考えているわけである。北海道以外の地方でこの種の調査をおこなったことがないのでわからないが、東北地方の仙台市や九州地方の福岡市では無論のこと、関西地方においても京都市や大阪市のことには「方言」でしかないであろう。北海道の特殊性が、ここにかがわれるのである。

年層別にみると、弁天の小中学生、唐津の戦後生まれ・小中学生で、「札幌」よりも「東京」が多くなっている。若い人々の間には、このような認識がしだいに育ちつつあるようである。これは、札幌市での調査結果に通じるものである。

東京と札幌を「同じ」とする回答も少なくない。東京のことばと札幌のことばとを比較して、「同じ」とみる立場はむしろ、はっきりと「札幌」とする立場に通じるであろう。したがって、「同じ」を「札幌」に加えるならば、札幌の比率はさらに高くなるのである。

### 3 同じく道南の南茅部町(注3)(一九七八)では、

表19 標準語(1978)  
南茅部町

事項	年層	
	札幌	東京
明治生	638	21%
大正生	1256	9%
戦前生	854	12%
戦後生	848	14%
小中 学生	521	40%
全体	743	21%

であった。「わからない」が多かったため、%値は松前町よりも低いが、「東京」対「札幌」はほぼ1対2の比率になっており、松前町の場合よりもむしろ「札幌」の比率が高いと考えられるのである。

小中学生でこの比率が逆転して「東京」が多くなるのも、松前町の場合と似ている。

### 4 道南地方と同じく海岸方言とされる道北の増毛町(注4)(一九七七)では、

表20 標準語(1977)  
増毛町

事項	地点	
	札幌	東京
明治生	448	39%
大正生	1279	9%
戦前生	1766	17%
戦後生	1436	50%
小中 学生	1422	64%
全体	1344	39%

であった。%値が松前町のものにかなり似ている点が注目される。松前町よりも「東京」の比率がやや高くなっているものの、「札幌」のほうがもっと多い。増毛町でも「札幌」に軍配を上げているのである。「同じ」とするものを「札幌」に加えるならば、東京と札幌の差はいつそう大きくなる。商店街の島中で東京と札幌とがいちばん接近している。それだけ東京を高く評価しているわけである。

年層別にみると、増毛町でも小中学生で「東京」のほうが多くなっている。これは道南の松前町や南茅部町と同じ傾向であって、内陸部の農村や都市にくらべて、いくぶんだつ海岸方言の特色となつている。

5 次に、内陸部の農村の例をあげよう。道東十勝の豊頃町二宮<sup>(注5)</sup>(一九七九)では、

表21 標準語 (豊頃町 1979)

事 項	年 層		
	同 じ	札 幌	東 京
明治生	30	52	15%
大正生	37	45	17%
戦前生	22	56	22%
戦後生	36	36	28%
学小生	17	48	35%
全 体	30	46	23%

であった。「東京」が老年層から若年層になるにつれて徐々に増加する傾向がみられるが、全体として「東京」対「札幌」の比率は1対2であり、札幌の優位は動かない。「同じ」を札幌に加えるならば76%となり、標準語としては東京のことはよりも札幌のことはが考えられているのである。

6 道央空知の栗沢町礪波<sup>(注6)</sup>(一九七七)では、

表22 標準語 (栗沢町 1977)

事 項	年 層		
	同 じ	札 幌	東 京
明治生	26	37	20%
大正生	16	56	20%
戦前生	22	47	30%
戦後生	39	14	33%
学小生	29	35	34%
全 体	23	42	27%

であった。ここでも「同じ」の比率が大きいが、豊頃町よりも「東京」がいくぶん多くなっている。豊頃町が東日本方言、とくに南奥方言のなごりをいくぶんどめているのに対して、栗沢町は西日本方言(北陸方言)の系統である。東北出身者よりも西日本出身者のほうが全国共通語化しやすい。その裏がえしとして、全国共通語化のすすんだ地点では「東京」の比率が高くなり、おかれてる地点では低くなっている。東京のことはと札幌のことはとの比較において、標準語として「東京」をとるか「札幌」をとるかということが、その地点の全国共通語化のパロメーターともなりうるのである。しかも、そのことが北海道内各地の人々に、ほとんど意識されていないだけに、のちに述べるように、やっかいな問題が生じるのである。

7 では、札幌市で調査したらどうなるか。札幌市S<sup>(注10)</sup>(一九七八)によれば、

表23 標準語 (札幌市S 1978)

事 項	年 層		
	同 じ	札 幌	東 京
1	29	30	32%
2	11	43	39%
3	10	37	46%
4	9	15	66%
5	13	29	53%
全 体	15	31	47%

であった。年層1・2では「東京」と「札幌」との差がほとんどないが、年層3で「東京」が多くなり、年層4と5では圧倒的に「東京」が多い。全体で見ると「東京」47%、「札幌」31%で、他地点と異なり、東京が優位となっている。札幌市では、ふだんのことば

づかいと「東京」のことは（―それはたぶんテレビのことばであり、また直接に東京方面との交流もある）とを直接比較することができ、そのため、札幌のことばの方言性を意識し、東京に軍配をあげることになったのだと思われる。それにしても、「同じ」が15%あり、これを札幌に加えるとすれば、東京と札幌とが同率になるのであって、依然として北海道という土地がらの特殊性がうかがわれるのである。また、札幌市K（一九七七）でも、

表21 標準語  
(札幌市K 1977)

事 項	年 層	
	一 代 め	二 代 め
東 京	38 %	38 %
札 幌	25	25
同 じ	13	21
	20 %	32 %
	66 %	47 %

となっており、東京と札幌との%値は札幌市S（一九七八）に極似している。ただ、札幌市Sでは既婚者だけが調査対象となっているため、小・中・高校生あたりのデータがない。札幌市Kによれば、三代め（中学生・高校生他）の部分で「東京」が急激にふえ、「札幌」がそれだけ少なくなっており、興味ぶかい。

### 五、標準語教育のために

1 以上に見てきたように、北海道では、北海道のことばについての特殊な「標準語意識」がもたれていることがわかる。

北海道南部には鎌倉時代ごろから和人の移住があった。じつさいには、室町時代末期ごろから、松前町あたりが栄えていた。道南地

方は五〇〇年の歴史を有するわけである。ところが、北海道の大部分の地域には、明治時代になって札幌に開拓使が置かれてからの移住であり、たかだか一〇〇年の歴史しかない。そうした移住と歴史のちがいが、今日の北海道方言を、「海岸方言」と「内陸方言」とに二分することになった。その「海岸方言」地域では地もとのことばを「方言」と意識するが、「内陸方言」地域では「方言」とは考えられていない。

「北海道のことば」ということになれば、全国諸方言の混淆によって北海道なりの「共通語」（―それは「北海道地域共通語」であり、また「北海道方言」である）が作りあげられてきただけに、「方言」と意識されることはなく、「標準語に近い」と考えられている。北海道の中心都市「札幌」のことは、「東京」のことばよりむしろ「標準語」的であるとする発想・認識も、その延長線上にある。北海道の人々には（道南地方など一部を除いて）、日常生活のなかで、「方言」はもはや存在せず、「標準語」（に近いことば）を使っていると、漠然と考えられているのである。

全国各地からの移住者たちが寄り集まった明治時代においては、ことばの障害のはなはだしいものがあつたであろうが、今日の北海道ではもはやことばのうえでの障害はなんら存在しない。しかし、そうした意識・認識は、むしろまさしく漠然とした「感じ」にすぎないのであって、移住後三代目・四代目となって、北海道という地域に根ざした新しい「北海道方言」が成立してきているのである。<sup>(注12)</sup>北海道では、そうした現実直視の姿勢と、言語感覚を、しっかりと身につけさせる必要がある。

2 北海道では、多くの人が「北海道のことば」を「標準語」と考え、自分たちの地もとのことばについてもまた「標準語」と考える人が少なくない。そうして「標準語」とは、「東京」のことばよりもむしろ「札幌」のことばをそう考えがちである。

確かに、実情として、北海道のことばは全国共通語にきわめて近い。そのため、家庭生活でも、学校生活でも、社会生活でも、ことばづかいのうえで、とくに不便を感じることはほとんどなく、自分たちのことばづかいをむしろ「標準語」と考えることもなった。

小・中学校の教師でさえも、私が授業をみせてもらったさいに、「ごみナゲテ（捨てて）来い」「マドアケレ（窓を開ける）」などと言いながら、なおかつ、教師自身や児童・生徒のふだんのことばづかいを「標準語」だと思ひこんでいることが多い。「標準語」か否かの反省さえしないのである。

しかしながら、北海道のことばは「標準語」そのものではない。

北海道では、まず、「方言」と「標準語」との認識、ことばづかいの自覚化から、標準語教育を始めなくてはならない。日常の言語生活のなかでの方言意識が薄いだけに（裏がえしている）標準語意識が強いだけに、学校でも、社会でも、かえって標準語教育がなおざりにされている。標準語教育の必要性自体が、ほとんどかえりみられていないのである。場面に応じての、方言から全国共通語・標準語への切りかえについても、具体的に、どのような点に適応・不適応がみられるかの調査研究は、これまでのところ、きわめて不十分でしかない。学校現場と提携して、言語生活の充実・発展を期す

るための、標準語教育についての調査研究と実践活動とを、おおいに推進させなくてはならないと、切に思うものである。

(一九八〇・三・三一)

#### 注

(1) 一九七九年一月に面接質問調査を実施。全住民を対象として、漁村の弁天で二八名、商店街の唐津で一六二名、計二九〇名(94%)の調査を完了。調査員は学生三名を含む北海道方言研究会会員(小・中・高・大学教員)一二名。

(2) 九州の熊本市(一九七九)での調査例をあげれば、「知らない人に道を探ねるとき」に、「熊本で」は方言31%、標準語42%、半々27%に対して、「東京で」は方言1%、標準語77%、半々22%であった。松前町の漁村と商店街との中間になっており、その点は増毛町(表3)とくらべても同様である。九州の大都市におけることばの使い分け意識が、北海道「海岸方言」のなかの漁村と商店街のほぼ中間あたりに位置づけられるのは興味ぶかい。資料は、三石泰子氏が一九七九年七月に短大生一七名を調査員として、熊本市古町で七八名(明治31年生まれから昭和41年生まれまで)について面接質問調査したものである。

(3) 一九七八年九月にアンケート調査を実施。南茅部町内の全小・中・高校の協力をいただき、全住民を対象として約三三三〇名分(約45%)の回答を得た。いま直接にとりあげるのは、このうち約一三五〇名分のデータである。

(4) 一九七七年一月に面接質問調査を実施。漁村大別荘、農村信

砂六区、商店街畠中町三丁目、三地点での全数調査。大別荘二一七名、信砂一五九名、畠中一二九名、計五〇五名(96%)の調査完了。調査員は学生九名を含む北海道方言研究会会員(小・中・高・大学教員)一六名。

(5) 一九七九年八月にアンケート調査を実施。二宮地区の全住民を対象としたもので、別に面接調査をおこなったさいに回収した四三六名分(93%)のデータである。

(6) 一九七七年八月に面接質問調査を実施。全住民を対象として一六一名分(約40%)の調査完了。調査員は学生五名と小野。

(7) 一九七七年八月に、鎌田朱実氏(北海道大学文学部学生)が一代め(明治32年)大正2年生まれ八名、二代め(大正15年)昭和17年生まれ)八名、三代め(昭和29年)37年生まれ)三〇名、計四六名について、札幌市白石区で面接質問調査を実施した。これを札幌市K(一九七七)と称する。

(8) ちなみに、九州の熊本市(一九七九)の例をあげれば、

事項	年層			全体
	明治	大正	昭和	
標準語に近い	7 (44)	3 (19)	6 (32)	16 (55)
方言に近い	9 (56)	13 (81)	11 (65)	33 (95)

数字は人数、( )内は%。

のようである。同じく地方中心城市のことはであっても、札幌市とちがって熊本市では、「標準語」が少なく、「方言」が圧倒的に多い。資料は(注2)の三石氏のものによる。

(9) 北海道方言研究会叢書第二巻「松前のことば―北海道松前町における共通語化―」(北海道方言研究会、一九八〇年)のなかで、くわしく報告した。

(10) 一九七八年七月に東京大学文学部言語学研究室(柴田武教授)が面接質問調査を実施。札幌市宮の森地区で、一戸建てとマンションの居住者それぞれ二五〇組ずつの夫婦を対象として、五〇八名(51%)の調査完了。調査員は柴田教授、荻野綱男助手ほか大学院生・学部学生あわせて二二名(小野も参加)。これを札幌市S(一九七八)と称する。資料は荻野氏の厚意による。

(11) 加藤正信氏の調査(一九八〇)によれば、「東京で話されている言葉は、そのまま標準語であると思えますか。」という問いに対して、次のような結果が得られた。

事項	出身地			年層
	東	北	非東北	
思う	21	21	21	高校生
思わない	51	68	68	高校生
わからない	26	11	11	高校生
総数(人)	38	272	310	大学生
思う	9	9	9	大学生
思わない	13	13	13	大学生
わからない	14	14	14	大学生
総数(人)	75	208	208	若年層
思う	29	29	29	若年層
思わない	61	61	61	若年層
わからない	9	9	9	若年層
総数(人)	174	174	174	老年層
思う	18	18	18	老年層
思わない	64	64	64	老年層
わからない	4	4	4	老年層
総数(人)	84	84	84	老年層
思う	42	42	42	老年層
思わない	15	15	15	老年層
わからない	4	4	4	老年層
総数(人)	5	5	5	老年層

数字は%。年層のうち、「若年層」は昭和5年以後、「老年層」は昭和4年以前の出生者。

また、「北海道の札幌の言葉は、標準語と同じだと思いますか。」という問いでは、次のようであった。

事項	出身地		年層
	東 北	非東北	
思わぬ	54	31	高校生
	55	32	大学生
思わない	51	38	若年層
	46	39	老年層
わからない	49	40	首都圏
	39	25	東 北
	60	24	非東北
	30	22	東 北
	80	—	非東北

これよつてみると、東京のことは「標準語」だと思つて人はごく少数であり、東北出身の大学生では「思ふ」9%に対して「思わない」が78%にもなつてゐる。一方、札幌のことはについても「標準語」だと思つて人はわずかしかないが、「わからない」が多く、「思わない」は比較的少ない。東京のことはくらべて、札幌のことは知られてゐないわけである。ところが、東北出身の若年層・老年層ともに、札幌のことは「標準語」と思ふ比率が東京のことはよりも多い。高校生や大学生は札幌のことはを知らなくても、東北出身の社会人は札幌のことはに接する機会があつてか、東京のことはよりも札幌のことはを標準語とみなしているわけである。もとより質問項目が別になつてゐるので、直接に比較はできないが、北海道における札幌のことは標準語視と同様の傾向が、少なくとも東北地方にもみられると考へてよいであらう。

(12) 本論では「北海道方言」の実態についてはふれずに、もつぱら「意識」の問題を論じた。

#### 付 記

小稿は、文部省科学研究費特定研究(1)「言語生活を充実・発展させるための教育に関する基礎的研究」のなかの一つ、「社会関係・場面に応じた言語行動」(代表者、埼玉大学教養学部教授柴田武)のうち、筆者が分担した北海道松前郡松前町での調査・研究の成果を中心に、執筆したものである。その骨子は、「北海道方言研究会叢書第二巻「松前のことは——北海道松前町における共通語化——」(北海道方言研究会、一九八〇年)の第十四章「松前ことは標準語意識」として発表したのが、今回、他の調査資料もあわせて、全面的に書き改めた。調査全般にさまざまなご配慮をいただいた柴田先生、資料を提供してくださつた加藤・荻野・三石・鎌田各氏、調査地点の関係者各位、調査にあつた北海道方言研究会会員諸氏および北海道大学・北海道教育大学旭川分校学生諸君に、謝意を表する次第である。

(北海道教育大学旭川分校助教授)